ふれあい下水道館界隈の今昔

「ふれあい下水道館」と云うしゃれた名前の施設が東京・小平市にあります。正式名称は小平市公共下水道管理センター。西武国分寺線の鷹の台駅が最寄駅です。博物館法に則ってはいませんが、小平市の水環境の歴史や地下に隠された下水道の実態を映像・模型・写真などを使って説明している四つの展示室のほか講座室や図書室を有する施設です。平成七年十月に開館。

圧巻は、地下二十五メートルに埋設されている実際の下水道管の内部を見学できることです。地下五階のふれあい体験室の二重の防水扉を開けると、そこは内径四・五メートルの地下鉄も通れるほどの大きさの下水道管の中で、見学ステージが設けられています。この下水道管の流末は、東京都流域下水道本部が管理している北多摩一号水再生センターです。

▲下水道管内の見学（パンフレット）

ふれあい下水道館のすぐ傍を江戸時代初期に開削された玉川上水が東西に走り、清流復活事業で導水された下水の高度処理水が流れています。週末ともなると、ウォーキングスタイルの多くの老若男女が遊歩道を散策しています。

今回の職場界隈探訪は、その趣旨をやや拡大解釈して、小平市が管理している「ふれあい下水道館」界隈の今昔を「水と緑」をキーワードにして訪ねることにしました。探訪ルートは、西武拝島線玉川上水駅→（玉川上水沿いの遊歩道を下る）小平監視所→ 上水小橋（高度処理水放流口）→ 鷹の橋→ ふれあい下水道館→ 鎌倉橋→（旧鎌倉街道を南に辿る）熊野神社→ 東福寺→ 姿見の池→ 街道遺構の切通し→ JR西国分寺駅です。

小平監視所

玉川上水駅で降り、玉川上水に架かる清願院橋を渡り右岸を下ると、ほどなくして沈砂池とスクリーンを配した東京都水道局の小平監視所が見えてきます。多摩川の羽村の堰から流れてきた水道原水は、ここで砂が沈められ流木などが除かれ、その全量が地下に埋設された直径二メートルの送水管により自然流下で東村山浄水場へ送られています。

晩秋になると、スクリーンはフル回転となります。両岸に繁茂しているクヌギ、ナラ、ケヤキ、サクラなどからの落葉が流れ着くからです。玉川上水を監視・管理する役所は、江戸時代には水番屋と呼ばれ、明治以降は水衛所となり、さらに昭和五十五年以後は監視所と名称が改められています。

▲小平監視所（玉川上水）

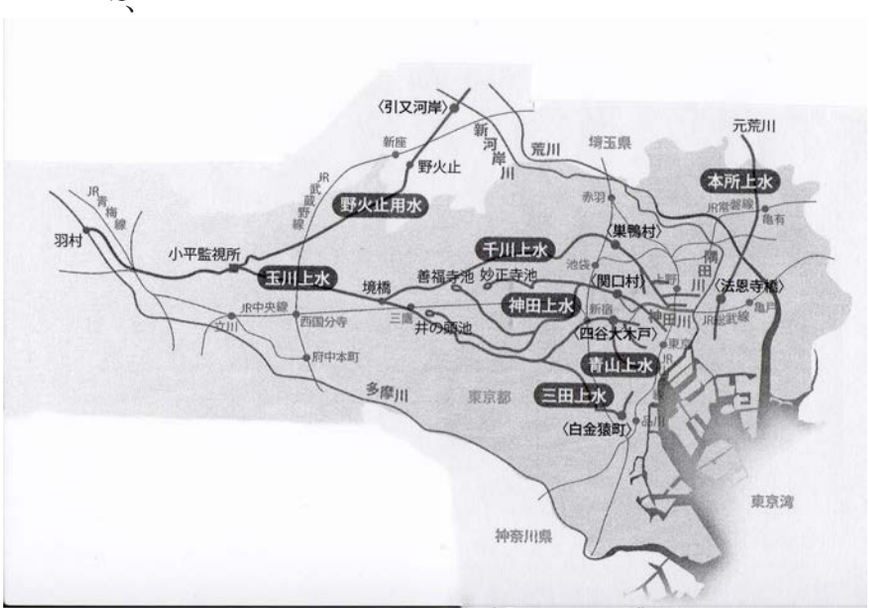
玉川上水

玉川上水は、江戸の町の人口増に伴う水需要の増大に合わせて開削されたものです。完成は承応二年（一六五三）といわれています。幕府が置かれてから五十年後のことです。羽村から四谷大木戸（今の新宿御苑の一部）までの約四十三キロメートル、高低差九十二メートルの流れです。四谷大木戸からは、江戸城をはじめ、四谷、麹町、赤坂、芝、京橋方面に、地下

に石樋や木樋を埋設し自然流下で給水していました。飲料水に用いられるため、上水路は常に清潔でなければなりません。そのため上水の管理者は清浄と美観を保つため両岸に松や杉を植え、その管理に務めました。

玉川上水は、両側の地域にも分水できるように、台地上の分水嶺を選んで開削されています。小さな谷が入り組んでいる代田橋（世田谷区）から下流では、水路が迂回を繰り返しています。江戸中期には分水は三十三ヶ所にのぼり、武蔵野の新田開発の重要な柱になりました。柴崎村用水、砂川分水、野火止用水、小川村分水、鈴木新田分水、国分寺村分水、千川用水、品川用水、三田用水などで、全水量の約五十％が分水されていました。

当初は飲料水としての使用が原則で、畑や水田への引き込みは禁止されていましたが、その後新田開発が奨励されるようになると、次第に灌漑用水や水車の動力用水としても利用されるようになりました。上水の利用には、「水銀」と云う一種の水道使用料金が課せられました。



▲江戸の六上水と野火止用水（緑と水のひろば）

小平と玉川上水

小平市は、荒川水系と多摩川水系の分水界をなす台地上にあり、市域の縁辺部が石神井川、黒目川、仙川、野川のそれぞれの源流地帯となっているだけで、市域の大部分には自然河川がありません。飲料・生活用水ばかりでなく農業用水も、市の中心部を貫通して流れている玉川上水からの分水に長らく依存してきました。

小平市の礎になった小川村の開発は、狭山丘陵麓の岸村出身の小川九郎兵衛が明暦二年（一六五六）に開発を願い出て許可され、西は玉川上水と野火止用水の分水口より東は田無村にかけて開発するよう申し付けられて、翌三年（一六五七）に着手したことに始まります。

小平市教育委員会が市制施行（昭和三十七年〈一九六二〉）五周年を機に刊行した『郷土こだいら』にこのような記述があります。

「武州多摩郡小川村の名主小川弥次郎が村内を流れる用水に水車をかけたのは明和二年（一七六五）のことである。田が少なく、生鮮野菜の産地としては江戸に遠すぎ、したがってこのあたりの主要農産物はムギ、ヒエ、アワ、ソバなどの雑穀であったので、これを精製しないと商品にならない。弥次郎はそこに目をつけて水車利用の加工を思いついたのである。手回しの臼しかなかったところへの動力による水車の出現は、村にとってはまさに「産業革命」であった。製粉、脱穀の能率は飛躍的にあがった」

さらに『玉川上水　親と子の歴史散歩』（比留間博、たましん地域文化財団）は、小川新田の地割や雑木林についてこのように解説しています。

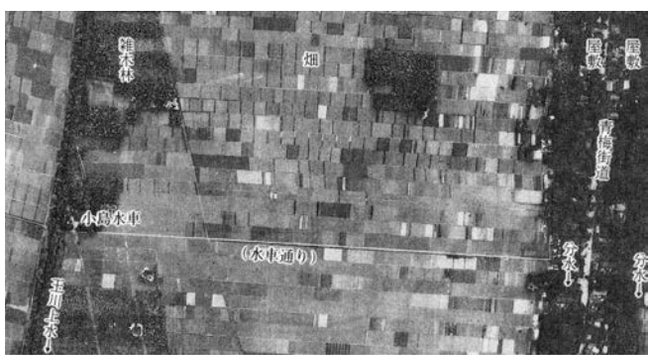
「幕府から開発が許された土地は、野火止用水と玉川上水のあいだです。一軒の幅は十から十五間ぐらいに区切ります。青梅街道の両側に家を建

▲　水車（玉川上水）

て、細長い畑がずっと続き、奥は草原と雑木林にしました。分水は南の玉川上水から引かれてきます。集落の西はずれで二本に分かれ、一本は街道を潜って北側の集落へ向かいます。どちらもほぼ屋敷の裏を東へ流れます。それぞれの家では、水路の脇に洗い場をこしらえ、そこから水をくんで台所まで運びました。このように小川新田は分水を受けて開発が進み、宿場村となりました。」

玉川上水は、明治に入っても重要な水道施設として引き続いて使用されていましたが、明治三十一年十二月に近代的な改良水道（淀橋浄水場を含む）が完成したことにより、若干の猶予期間を置いた明治三十四年六月をもって、東京市中へ給水するという当初の務めは終りました。

これ以後、玉川上水の水路は、昭和四十年三月まで、淀橋浄水場（新宿区）への原水導水路としての役割を果たすことになります。かつては、水路幅一杯に満々とした水（日量三十万立方メートル）がとうとうと流れていました。上水に覆い被さるように木立が茂り、所々に素掘りの土が顔をのぞかせている、とても人工の水路とは思われない自然味豊かな流れでした。



▲　小川の新田地割（玉川上水）

▲　野菜を洗う（緑と水のひろば）

『武蔵野』にみる玉川上水

明治二十八年の夏、「ふれあい下水道館」からさほど遠くない小金井の堤を上流に向かって歩いた国木田独歩は、『武蔵野』にその情景を書き印しています。

「長堤三里の間、ほとんど人影を見ない。農家の庭先、或いは藪の間から突然、犬が現れて、自分等を怪しそうに見て、そしてあくびをして隠れて仕了う。林の彼方では高く羽ばたきをして雄鶏が時をつくる。それが米倉の壁や杉の森や林や藪に籠って、ほがらかに聞える。堤の上にも家鶏の群が幾組となく桜の陰などに遊で居る。上水を遠く眺めると、一直線に流れてくる水道の末は銀粉を撒いたやうな一種の陰影のうちに消え、真近くなるにつれてぎらぎら輝て矢の如く走くる。…　橋の下では何ともいいようのない優しい水音がする。これは水が両岸に激して発するのでもなく、また浅瀬のような音でもない。たっぷりと水量（みずかさ）があって、それで粘土質のほとんど壁を塗ったような深い溝を流れるので、水と水とがもつれてからまって、揉みあって、みずから音を発するのである。何たる人なつかしい音だろう！」

屋敷林と雑木林

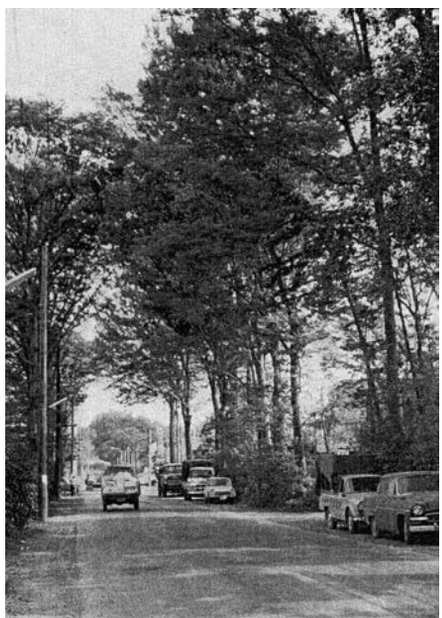
独歩が点景として触れている小平付近の屋敷林や雑木林について、『郷土こだいら』は次のように詳述しています。

「寒風はださす頃ともなれば、林の落葉樹の枝を透して農家が見出せる。北西の寒風は北側の杉林や竹林にさえぎられ、南は日光が庭を暖かく照らすのである。カシ、杉は二十年から三十年位で、ケヤキが最も老齢のものが多い。…　江戸時代の頃より年月をかけて作り出された生活の知恵であろう。ケヤキは落葉が堆肥になり、家を建て替えるときの柱その他の用材に適し、カシは成長も早く鋤や鍬の柄や天秤棒として農家にはなくてはならない用材であり、竹は家具材・器具材として養蚕家には大切なものであり、野菜を入れる籠にいろいろと利用度が広いのである。…　耕地の中に

も防風垣が設けられ…　冬の強風が北西であるため、茶の一列植えは東西に長く植えられている。…　同時に桑の一列植えも見逃すことは出来ない」

屋敷林は、冬の北西の季節風が巻き上げる土ぼこりが家の中に入るのを防ぎ、さらに、雑木林とで挟まれた畑の作物を風害から守ることにもなります。青梅街道とか五日市街道に沿ってケヤキが並んでいるところがありますが、日光の杉並木、東海道の松並木とはちがい街道のために植えたのではなく、新田の屋敷が街道に沿って並んでいるため、隣の屋敷林とつながって、あたかも並木のように見えるのです。

雑木林の大事な働きの一つは燃料です。そのため、クヌギ、コナラ、エゴノキなど秋に葉を落とす種類の木を植え、薪、木炭にして自家用にしたほか、江戸へも売っていました。さらに、雑木の落葉や下草は肥料にしました。



▲　青梅街道のケヤキ並木（郷土　こだいら）

景観の変遷

武蔵野の景観の変遷について、鳥居龍蔵は『武蔵野及其有史以前』（大正十四年）の中で、

「洪積層の高台は概して濶葉樹の森林が多くあったと見てよろしいのである。しかもそれが密林でほとんど横断の出来ない原生林である。どういう木が生えて居ったかというと、樫、欅、椎…　こういうふうのものが多くあった。それが段々、火の作用や色々の作用によって、あるいは焼かれあるいは伐り尽くされたので、今日のような武蔵野になって仕舞ったのである」

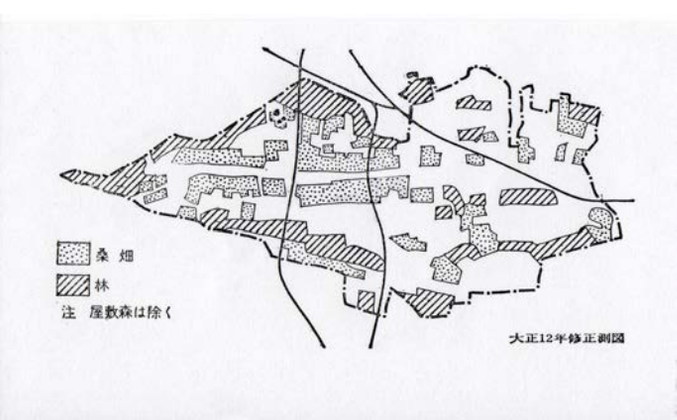
と述べています。

鳥居が「色々の作用」と云っている要素の一つにウマの放牧があります。日本でウマが盛んに飼われるようになったのは、豪族や武士が地方におこってくる頃で、関東平野や信濃、甲斐などがその中心です。関東武士団はそれぞれの根拠地に牧場を持ち、農耕とともに常に軍馬を養ってきたのです。これらの牧場はススキ原であり、武蔵野のススキ原は関東武士の故郷であったわけです。

小平の近くに野火止という地名が残っていますが、広大な武蔵野を開拓するには林野を焼き払ってその灰を肥料にして、牧場や畑を拓いていったと思われます。こういう農耕の結果として生まれた景観が鎌倉・室町時代に見られた広大なススキ原だったのです。

シイやカシの常緑広葉樹林を切り拓いてそのまま放っておくと、クヌギやコナラなどの雑木林になりますが、毎年くりかえして低木を切りとったり、草を刈ったり、家畜を放牧し続けると、林になることができずに、ススキやシバの草原になってしまいます。一方でこのススキ原も、採草や放牧をしないで放置しておくと、数十年の間に雑木林に変わっていくのです。

小平では江戸時代から養蚕・製糸業がかなり行われていましたが、明治の中頃になると九割近くが養蚕を行うようになり、これにともない桑畑が増加してきました。見渡す限りの桑畑が続き、その間に甘藷や陸稲の畑が点在するという景観が作り出されました。土地が痩せ水の便の悪いところでも栽培できる桑は、小平には絶好の作物だったのです。養蚕の最盛期は、明治四十年頃から大正中期にかけてです。



▲　桑畑と林地分布（郷土こだいら）

通船

明治二年、羽村の名主源兵衛、福生村の名主半十郎、砂川村の名主源五右衛門らの連名で明治政府に通船計画が出願され、許可されました。一年ほどの時間をかけ、橋のかさ上げ・架け替え、水路幅の拡張、船溜り・荷揚場の設置などの工事が進められ、明治三年四月から通船が開始されました。「ふれあい下水道館」のすぐ横を通る府中街道に架かる久右衛門橋のたもとにも船溜りがあったとのこと。

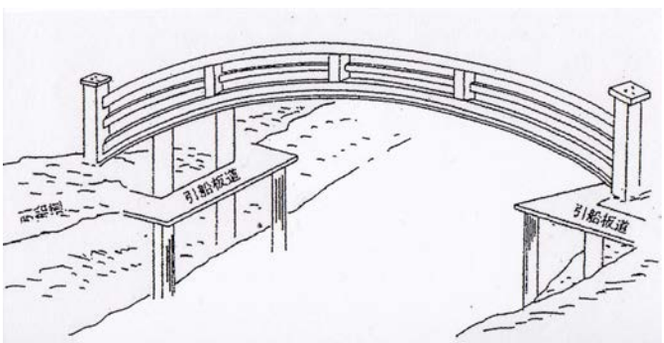
下りの船は水の流れに乗ってそのまま下り、上りの船は船頭が一人船に乗り舵を取り、他の二人が上水の両岸に設けられた引船道を、ロープで船を引っ張りながら歩いたそうです。

東京への下りの荷物は、野菜、茶、織物、薪、木炭などが、また、東京からの上りは、米、塩、魚類などが運ばれました。これらの物資ばかりでなく人も乗せました。

漢学者・林鶴梁が青梅・奥多摩を旅行した折（明治四年秋）の紀行文にこんな記事があります。

「青梅から多摩川の下りの船に乗る。船は三十人乗りである。羽村に出て多摩川の本流から直接玉川上水に乗り入れた。川幅は極めて狭い。小金井まで下ると風が背後から起こり船が走り、両岸の桜の枝が揺れる。午後になると皆弁当を開き、行商を行う」

巴河岸（現在の立川市砂川）から四谷大木戸までの約三十三キロメートルの運賃は、下りが一人銀六匁、上りが銀十二匁、荷物一駄（約四十貫）が一人分の運賃と同額であったとのことです。



▲　引船道（玉川上水ワンポイントガイド）

しかし、狭い水路での頻繁な通船の往来は水質汚染を招き、また両岸の崩壊にも繋がるということで、明治五年五月に禁止されてしまい、玉川上水の通船はわずか二年一ヶ月で終わりました。

清流の途絶と復活

昭和四〇年三月をもって、淀橋浄水場は廃止されました。その結果、上流の羽村取水堰から小平監視所までの区間（約十二キロメートル）は、代替の東村山浄水場へ水道原水を送る導水路の一部として活用されましたが、これより下流は昭和四十六年以降、空堀状態になってしまいました。

その後の清流復活事業の実施によって、小平監視所から浅間橋（杉並区、現在はない）までの中流の区間（約十八キロメートル）に、多摩川上流水再生センターの高度処理水（日量二万立方メートル強、往時の十数分の一）が流されるようになったのは昭和六十一年なってからです。

清流復活事業は、東京に残された貴重な水辺空間である中小河川や用水路の水源が枯渇し平常時の水量が激減してしまったことへの打開策です。各種住民団体からの要望を受け、「マイタウン東京構想」の一環として、下水の高度処理水やビル湧水などを活用し清流を復活させ、都民に身近な親しめる水辺空間をよみがえらせようと企画されたものです。

▲　多摩川上流水再生センター

高度処理水についてですが、当初は【二次処理＋砂ろ過処理】でしたが、平成三年にオゾン処理が加わり、さらに平成十三年からは嫌気・無酸素・好気法が導入されています。

最下流の約十二キロメートルの多くは暗渠化され、その上は高速道路や公園や遊歩道路になってしまいました。ほんの一部は開渠として残っていますが、その側岸は崩れ浅くなり、わずかな滲み出し水が細々と流れているのです。

小平監視所の直下に新たに上水小橋が架けられ、水辺まで下りることができるようになりました。関東ローム（赤土）の厚い層を開削して、この上水路が造られていることを間近で見ることができます。ここから西武国分寺線鷹の台駅付近までの約四キロメートルの区間は、新堀用水が並流しています。

新堀用水は、明治三年に玉川上水で通船が行われるようになったとき、小平監視所から桜橋（小平市）までの左岸に新たに開削されたものです。この用水へは多摩川から取水された水道原水の一部が流されています。したがってこの区間では、再生水の流れと多摩川からの流れ（大雨の後では濁水となる）とを左右に見比べながらの贅沢な散策を満喫できます。

玉川上水は、貴重な歴史的土木文化遺産として平成十五年、文化財保護法に基づき「国の史跡」に指定されました。指定範囲は下流部の暗渠部分を除いた約三十キロメートルです。土地の所有・管理者は東京都水道局

▲　再生水が流れる玉川上水

▲　再生水の玉川上水への導水口

です。また、これに先立つ平成十一年にすでに、玉川上水周辺の雑木林を含めた一帯は東京都歴史環境保全地域になっています。

なお、玉川上水に関連して、昭和五十九年に野火止用水が、また千川上水は平成元年に、それぞれ途絶えていた清流が復活しています。

津田塾大学と玉川上水

玉川上水と府中街道とが交わっている角地に鬱蒼とした緑があります。ここの特別教室で平成二十四年九月に玉川上水サミットが開かれました。小平市制施行五十周年を記念しての企画です。このとき、津田塾大学の飯野正子学長が「玉川上水と津田塾大学」と題して基調講演を行いました。その中でこんなエピソードを披露しています。

「津田塾大学の前身は、麹町・五番町で十人の学生をもって一九〇〇年に設立した女子英学塾です。創設者は日本初の女子留学生の一人として岩倉遣外使節団に同行・渡米した津田梅子です。その後、学校の拡張にあたって校地を郊外に求めていましたが、一九二二年に小平の現在地に決定します。契約の締結は、関東大震災の起きる九ヶ月前のことです。住所は北多摩郡小平村大字小川字鷹野街道外。二万五千坪で、買収価格は十万円だったそうです。校地選定の理由は、静けさ、清らかな眺めであったとのことです。

玉川上水の両岸はナラやクヌギなどの緑が美しく、晴れた日には北に富士山が望まれ、青梅街道が東西に延びケヤキの並木が高らかにそびえていました。青梅街道と玉川上水を斜めに結んでいる畑の中の道が「たかの街道」でした。

一九二三年（大正十二）九月、五番町の校舎は関東大震災で灰燼に帰しました。そこで、寄付金を募って資金を集め、ここに校舎を建てることになりました。一九二七年に建築計画ができ、まず最初に手がけたの

▲　小平グリーンロード

は、季節風が吹くと砂塵が舞い上がるので防風林として赤松、カシ、ヒノキなどを校地に植えることでした。こうして今のキャンパスの緑が始まったのです。玉川上水の流れとマッチし良いコントラストになりました。

一九二九年の秋に設計図が出来上がりました。病をおして校地を見に来た梅子は、せめて校門だけでも先に建てて欲しいと言っていたそうです。残念ながら、校舎や学生寮の完成を見ずにこの年に亡くなりました。校名を津田英学塾と改称したのも、この年です。一九三一年（昭和六）に新校舎が落成します。

ちなみに二年後の一九三三年に、東京商科大学（現在の一橋大学）の予科がこの近くに移転してきました。

玉川上水縁の遊歩道は「ラバーズ・レイン（恋人の小路）」と呼ばれていました。それは、一橋の学生がこちらに迎えに来て、津田の学生と連れ立って近くを散策している姿がよく見かけられたからです。この小路からたくさんのカップルが生まれ、その後結婚された方もいます。その一方で、サークル活動でスポーツをしていた人たちには、この玉川上水縁が全力疾走するトレーニングの場であったので、「過酷なコース」との印象が強かったようです。また、東京の大学に入ると言って上京して来たのに「ここが東京かしら」と、落胆した思いをもった方もいたようです。

そうした卒業生に在学時に心に残ったことを尋ねると、大学周辺の自然の四季の移り変わりの中での折々の美しさを上げる人が多くいます。教育的にみても、自然との対話はこれから一層重要になってくるでしょう。その点、この地域は自然が非常に重い価値をもっています。最近、校舎を増設した時も、緑の中で学んでいるという雰囲気を出来るだけ残すように心がけました」

▲　津田塾大学キャンパスの森

校舎を建築中の一九三〇年（昭和五）頃の校地は、以前の土地利用形態が耕地であったせいか全くの裸地であったとのこと。今見られるキャンパスの樹林は、その後の植林の成果だったのです。

旧鎌倉街道

玉川上水沿いの津田塾大学のキャンパスの緑が尽きるところに架かっている人道橋に「鎌倉橋」という名称がついています。鎌倉に幕府が開かれると、いつでも鎌倉に馳せ参じられるよう、鎌倉と各地を結ぶ道路網が整備されましたが、この橋の辺りにもそのような鎌倉へ通じる道（鎌倉街道）が通っていたのでしょう。江戸時代に入り新田の開発が進むとともに、姿を消してしまった部分が多いそうです。

すぐ近くの住宅地の中に立つ「小平市散歩道（鎌倉街道コース）」の標柱に勇気づけられて、府中街道（昭和十九年に開通）に並行しているこの旧道らしき道を辿ってみました。北へ行くと小川、東村山、所沢を経て高崎へ、南に行くと国分寺、府中、町田を経て鎌倉に至る古道の名残と思われます。国分寺方面に向かう（実際には畑や住宅

▲　鎌倉橋

◀　小平付近の旧鎌倉街道（多摩）

▲　姿見の池

や鉄路により各所で寸断）と、やがてこんもりとした古社・熊野神社に行き着きました。境内に、旧鎌倉街道にあった道標が移され保存されていました。

さらに南に少し下ると低地に出ます。ここが恋ヶ窪です。昭和四十五年頃までは一面の水田だったそうです。現在は大部分が住宅地になっていますが、「姿見の池」があった辺りは、復元整備され遊歩道が付けられ緑地保全地域となっています。かつての恋ヶ窪用水もせせらぎとして残されていました。「姿見の池」からの流れと、この東方にある日立製作所中央研究所内の池（武蔵野段丘からの湧き水が水源）より流れ出る小川とが合流して野川となります。

『武蔵野夫人』にみる恋ヶ窪

戦後の自由な解放感をバックにした恋愛心理小説『武蔵野夫人』（大岡昇平）は、野川や狭山丘陵を舞台にしており、武蔵野の自然が克明に描写されています。『武蔵野夫人』の恋ヶ窪の場面を次に紹介します。（　）内は筆者が注釈を加えたものです。

「川（野川の源流の一つ。日立製作所中央研究所からの流れとは別の源流）はしかし自然に細くなって、ようやく底の泥を見せ始め、往還（田無～小平～府中の通り）を一つ越えると、流域は細い水田となり川は斜面の雑木林に密着して流れ、一条の小道がそれに沿っていた。

線路（ＪＲ中央線）の土手へ登ると向う側には意外に広い窪地が横たわり、水田が発達していた。右側を一つの支線（西武国分寺線）の土手に限られた下は萱や葦の密生した湿地で、水が大きな池（姿見の池）を湛えて溢れ、吸い込まれるように土管（中央線の線路の下を潜っている）に向かって動いていた。これが水源であった。

土手を斜めに切った小径を降りて二人は池の傍に立った。水田で稲の苗床をいじっていた一人の中年の百姓は、明らかな疑惑と反感を見せて二人を見た。

「ここはなんてところですか」と勉は訊いた。

「恋ヶ窪さ」と相手はぶっきら棒に答えた。

道子の膝は力を失った。その名は前に勉から聞いたことがある。「恋」とは宛字らしかったが、伝説によればここは昔有名な鎌倉武士（畠山重忠）と傾城（遊女）の伝説のあるところであり、傾城は西国に戦いに行った男を慕ってこの池に身を投げている。…

彼女（道子）はおびえたようにあたりを見廻した。分れる二つの鉄路（西武国分寺線とＪＲ中央線）の土手によって視野は囲われていた。…

見すぼらしい二輌連結の電車が、支線の鉄路（西武国分寺線）を傾いて曲って行った。その音は彼女を戦慄させた。

彼女は恋人（勉）を見た。彼は無心に立ってただやっと得た水源を眼で調べているようだった。…

なお池に注ぐ細い溝があった。その水も豊かで早く流れていた。勉はさらにその溝を遡ることを主張した。

溝に面して農家があった。菜を洗っている農婦に何か訊ねている勉をおいて、道子は先へ歩いて行った。追いついた勉が、この溝の水はやはり玉川上水から引いたもの（国分寺村分水からさらに分かれた恋ヶ窪用水）だそうだから、要するに野川の源は多摩川の源と同じだ、というようなことをくどくどいっているのを、道子は聞いていなかった。…」

旧鎌倉街道は、東福寺の南でＪＲ中央線の西国分寺駅にぶつかりますが、その手前に舗装されていない切り通しの小道（約三十メートル）があり、そこにかろうじて旧街道の面影を見つけました。この先は街中に消え辿れませんが、一キロメートルほど南に進んだ国分尼寺跡の木立の中に凹状の二百メートルほどの旧道跡が残されていました。

▲　旧鎌倉街道の面影

悲しいロマンス

東福寺は、この辺りでは国分寺につぐ古刹です。ここに三代目といわれる「一葉（ひとは）の松」があり、その脇に「傾城の墓」がひっそりとたたずんでいます。「一葉の松」は、松の葉が枝から一枚で出ているという珍しいものです。

江戸時代（文化二年〈一八一五〉）に書かれた『武蔵野話』（斎藤鶴磯）に、「一葉の松」にまつわる悲しいロマンスが書かれています。

「畠山重忠は、嵐山の菅谷館からたびたび鎌倉に赴く時、恋ヶ窪でしばしの休息を取っていました。鎌倉一の美男子と謳われた若き日の武将・重忠と、いつしかただならぬ仲となった美しい遊女・夙妻（あさづま）太夫。折からの平家討伐に義経の軍に加わって出陣した重忠は勇名をはせた、かの愛馬三日月を背負って一の谷を降りたとされる時なのです。しかし、重忠の恋敵の男がいて、重忠戦死という嘘を太夫の耳に入れるのです。夙妻太夫は悲しみ、姿見の池に身を投じてしまったのです。このことを知った村人は、この夙妻太夫のために松を植えたそうですが、その松は不思議にも一葉の松になったそうです」

▲　一葉の松と傾城の墓

もっとも、この話は後世の創作ではないかと云われています。

しかし、『新編武蔵風土記稿』に

「いとにぎわいたる駅亭なりしかば、遊妓などもをりし故、それらの因によりて村名も起れりといふ、里正作左衛門の屋敷に一葉の松あり、古木は枯てうえ継しものなるべし」

と記されていることから、往時この寺の近くに宿駅があったことと「一葉の松」の存在は確かなようです。

参考資料（文中で明記したものを除く）

「玉川上水ワンポイントガイド」小平・玉川上水再々発見の会
「多摩　風土とその歴史」米光秀雄ら　武蔵書房
「旧鎌倉街道　探索の旅　上道編」芳賀善次郎　さきたま出版会
「多摩と甲州街道」新井勝紘ら編　吉川弘文館
「鎌倉街道伝説」宮田太郎　ネット武蔵野
「雑木林の博物誌」足田輝一　新潮選書

探訪余話

旧鎌倉街道を辿り西国分寺駅近くの姿見の池を巡り、東福寺の傾城の墓に詣でた後、旧道沿いのそば屋さんに立ち寄ったとき、思わぬ収穫を得ました。その店の壁に「詩」が飾られていたのです。店の話では、この詩の作者はこの界隈を散策する折に何回か来店してくれた藤木さんという初老の方だそうです。ある日、この詩を書いた色紙を店に寄贈して立ち去り、それっきり店に姿をみせなくなったとのことです。演歌の御当地ソングのような雰囲気の『国分寺情話』という題の三番までである詩です。「一葉の松」にまつわる恋ヶ窪のロマンスを下敷きにしているようです。もしかすると、この詩の作者は若き頃、津田塾大学の学長さんの話にも出てきた「恋人の小路」の散策を実践していたのではないか？　そして、玉川上水縁から旧

道沿いに国分尼寺辺りまで足を延ばしたカップルの一人だったのではないか？　などと勝手に想像をたくましくしてしまいました。探訪の記念にとこの詩を手帳にメモってきました。

国分寺情話

藤木宗春　作詞

1．
開けごらんよ　むさし野は
風に木の葉の恋しぐれ
私の夢が咲いた街
ふりむき歩るく国分寺
悲恋は遠く消えながら
姿見池にあゝ面影しずむ

2．
聞いてごらんよ　むさし野は
風の便りか遠くきく
足音わびしお鷹みち
恋の咲けない尼寺よ
偲べばくもる恋ヶ窪
都忘れのあゝ雨が降る

3．
歩るいてごらんよ　むさし野は
風が耳うつまわり道
鎌倉街道蔭に泣く
落ちる枯れに似るような
一葉の松のものがたり
多摩の流れにあゝ風が舞う

（了）